

IATSS三十周年によせて

交通問題における社会的観点からの思考の重要性

竹内健蔵 東京女子大学文理学部教授

1987年一橋大学大学院商学研究科博士後期課程単位修得。オックスフォード大学大学院修了(M.LITT.)。長岡技術科学大学工学部専任講師、助教授、東京女子大学文理学部社会学科助教授を経て2002年より東京女子大学文理学部社会学科教授。



最近、学会の『『安全』を考察する』プロジェクトに参加させていただき、経済学の観点から安全を再考する機会を得た。それを通じて認識を新たにすることがある。それは社会的観点から交通問題を眺めることの重要性である。

経済学では、(誤解をおそれずに言えば)最適な交通事故死者数を実現するための政策を提言する。「最適交通事故死者数」などという、経済学は反社会的なとんでもない学問だと言われかねないが、これは社会的観点に基づく論理的な思考の帰結である。確かに個人的な感情として交通事故の死傷者がゼロにならなくてはならない、と考えることは理解できる。しかし、交通事故をゼロにするためにはクルマ社会を放棄することが必要であり、それは実際にできるであろうか。経済学は交通事故を減らすことによって実現できる価値と、事故抑制政策に必要なコストを比較して、その差額が最大(つまり社会全体が実現できる価値が最大)になるような社会状態を目指す。これは社会的な観点に基づく。

以上は安全性についての例であるが、安全を含めて交通に関する重要な問題の一つは、個人の感情が優先され、社会全体の観点が欠落しがちなことである。ある交通問題に対して、個人がその場の感情に思考を任せることは安楽であるために好まれ、問題を社会的に論理的に考えることは面倒くさいし、頭を使うことだから忌避されやすい。その結果、ますます社会全体の観点からは何が望ましいのか、という思考が訓練されず、人々はその場の感情にのみ支配されていく。そして一部のマスコミは特定の社会現象を強調することによって、そうした人々の感情を煽ることすらある。

例えば、混雑している高速道路の料金を値下げせよ、という意見が人々の間で根強い。個人的な感情としては、混んでいるのに高い料金はけしからんが値下げで自分は得をするからよい、ということになる。だが、そこでは料金値下げによる高速道路利用の値ごろ感は自分だけではなく、自分以外の社会の全ての人を持っているのだ、と考えることが忘れられている。その結果ますます道路は混雑するであろう。これは社会的な視点が欠落している典型的な事例である。環境問題も同様である。環境汚染が完全にゼロであることが望ましいことは、筆者も含めて個人的な感情としてはわかる。企業もマスコミも「環境汚染ゼロ」を強調する。しかし安全と同様に、環境汚染をゼロにして真に地球に優しい環境を守ろうとすれば、人類は原始生活に戻るか絶滅するよりほかはない。しかし人々は生存したいであろうし、ある程度は文明的生活を送りたいであろう。社会全体としていかに最適な環境汚染水準を実現するか、を考えることが重要である。

経済学は個人的な利害を離れ、社会的厚生の上を目指す学問であるといつてよい。ところが、日本では経済学は国民が勉強すべき科目とはなっていないので、一部の人を除いて経済学は「お金儲け」の学問という印象を持たれている。そのため、経済学者の主張する社会的な観点から思考することの大切さが見過ごされる。もちろん経済学の考え方がいつも正しいということはないし、別の考え方を否定するものでもない。ただ、交通問題全般について、人々が個人的な感情や近視眼的、非論理的な思考によって支配され、それが誤った交通政策を導くことにならないように、本学会も常に

人々の啓蒙に努める必要があるであろう。